

知的障害者支援における「距離感」の再定義
—包括的セクシュアリティ教育に基づく関係性生成と応答的ケアの視点から—
松本和剛（日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科）

1. 問題意識と研究目的

知的障害のある子どもに対する支援において、「身体的距離」や「接触の可否」は安全管理上の重要な配慮事項とされる一方で、それが画一的な規範として内面化されることで、本人の関係性形成や性的自己決定に深刻な影響を与えることが指摘されている。本研究では、支援現場における語りを通じて、距離感にまつわる支援の実践がどのように構成され、どのような葛藤や応答が生じているのかを明らかにし、その再定義を試みる。

2. 研究の視点および方法

本研究は、2023年10月より毎月開催している包括的セクシュアリティ教育に関する実践研究会（地域福祉現場の支援者10名、経験年数3～10年）の語りを質的データとし、鯨岡峻（2005）のエピソード記述法に基づいて分析を行った。各発言を「背景」「エピソード」「メタ意味」の三層で記述し、支援の関係性の内面的構造に迫る。

3. 結果と考察

事例からは、「この子がお友達の口の中を見たいって言ったとき、『じゃあ自分の口を触ったら？』って提案したら、それで落ち着いた」というエピソードが確認された。この場面では、支援者が「どう伝えればこの子にとって意味があるか」を即興的に模索していたと語っており、本人の反応を手がかりに支援の言語や行為が動的に調整されていく様子が窺える。支援者の気づきと手応えが同時に生成されており、この相互変容のプロセスは、支援関係が一方通行ではなく「共創的」な営みであることを物語っている。またこのようなやりとりは、身体への関心や他者への探究心といった子どもの内的欲求を肯定的に捉え直す契機にもなっていた。この語りには禁止ではなく意味を読み解き、安全な代替手段を共に考える「共創的支援」が見られる。こうした関係性の構築には、Stern（2004）の関係生成理論が示す「今この瞬間」の共有が関与しており、Tronto（1993）のケア倫理における「気づき・責任・実行・応答」という四段階の構造とも合致する。このやりとりには、「一つの行為が相手との関係性を再構築する契機となり、当事者自身の気づきや変化をもたらす」というメタ意味が内包されている。さらに、Weingarten（1991）が提起した「親密性とは一つひとつの関係的やりとりの積み重ねであり、そこにはつながりだけでなく支配も含まれる」という視点は、距離感の判断が一律でないことを示している。また、Gilligan（1982）がコールバーグの正義論を批判し、11歳の少女Amyの語りを通じて提示した「ケアの倫理」の視点、すなわち対話と関係性の継続を通じて倫理的判断が形成されるという立場は、知的障害者支援における距離の調整にも有効である。これら古典理論の視点は、延原ら（2023）による態度尺度の開発研究が示すように、知的障害者の包括的セクシュアリティ教育に対する社会的態度の多様性と、支援現場での応答的姿勢の必要性を裏づける。

4. 結論

画一的な「距離の規範」ではなく、関係性の中で交渉される距離感、そして対話による選択と応答のプロセスそのものを支援の本質ととらえる必要がある。本研究は、距離感の支援を「応答的に形成される自己」の学習過程として捉え、「関係性の継続」を支える支援枠組みの構築を提案する。特にこうした支援関係の質的転換は、家族内の親密性や依存-自立の再編とも深く関係しており、福祉実践と家族社会学との接続的対話が今後求められる。

文献

- Gilligan, C. (1982) *In a Different Voice*, Harvard University Press.
- 鯨岡峻（2005）『エピソード記述入門-実践と質的研究のために-』東京大学出版会。
- 延原稚枝・武子愛・門下祐子・名川勝（2023）「知的障害のある成人の性的表現・行動に対する態度尺度の構成概念妥当性・信頼性の検討」『発達障害研究』45(2), 166-177.
- Stern, D. N. (2004) *The Present Moment in Psychotherapy and Everyday Life*, Norton.
- Tronto, J. C. (1993) *Moral Boundaries*, Routledge.
- Weingarten, K. (1991) "The Discourses of Intimacy", *Family Process*, 30(3), 285-305.
- キーワード：知的障害者支援, 包括的セクシュアリティ教育, 距離感